

# 新美南吉の詩集より

Nankichi×Step

南吉の詩は童話に勝るとも劣らず魅力的。  
地元を中心に活躍する現代の若手作家たちと詩をコラボレーションしていきます。



## 氷雨

氷雨が 村を  
濡らして すぎ  
北に 雲は  
象牙のように  
光る  
野を来る風が  
刃物のように  
鋭くなったこんな  
日暮だ  
わたしの祖父たちは  
はらいそは杳いと  
西の空のあかね  
洋燈を 研いだ

※杳い＝暗い、遙か

tomonori

イラストレーター

<http://cheekybutter.lomo.jp/>

少年少女を中心にその人物が纏う空気感を意識したイラストを描いています。「バター」のようにじんわり馴染む」をコンセプトにアクセサリーの制作・販売もしています。

絵について

つめたく降る雨とランプの光。  
交感する風景を描きました。

## 新美南吉



にいみなんきち  
(1913-1943)

大正2年7月30日、愛知県知多郡半田町(現・半田市)に生まれる。幼くして母を亡くし、養子に出されるなど寂しい子ども時代を送る。旧制半田中学校卒業後、「赤い鳥」入選を契機に北原白秋や巽聖歌の知遇を得る。昭和18年、結核のため29才で世を去る。

## 解説

「はらいそ」(ポルトガル語のキリシタン用語で天国・楽園)という言葉があるが、全体が西洋の宗教画を彷彿とさせるものをもってはいないだろうか。全く人為的なものを廃して、むき出しに放り出されている自然描写に対して、終わりの4行がまた謎めいて面白い。祖父たちが「はらいそは杳い」としていることから、この

村は昔からキリシタンの住む村であり、暮らしは華やかに満たされたものではなかっただろうと想像する。西の空が茜色に染まる中でランプを研ぐ姿からは、敬虔に生きようとする村人の思いが伝わってくる。つめたく研ぎすまされた自然の姿と光を求める祖父たちの姿とが見事に交感し合っている作品だ。

## 解説者

前新美南吉記念館館長

矢口 栄 さん

半田市、知多市、東浦町の小学校勤務を経て'04年から'11年まで新美南吉記念館館長を勤める。著書「南吉の詩が語る世界」(一粒社出版部)「子どもたちに贈りたい詩」(教育出版センター)「新しい詩の創作指導」(共著・明治図書)ほか。